神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

漢語福清方言の記述言語学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.11501/2017_K60_chen

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



陳学雄氏の博士論文審査について

博士論文審査の要旨

現代漢語（中国語）の記述言語学的研究は標準的な方言である普通話と広東語のそれを除くと、未だ極めて少ない。もちろん、昨今中国あるいは世界各地で漢語方言の参考文法は博士論文等で公開されつつあるが、音韻論の記述に重点が置かれるものが多く、文法全体のバランスから見れば大きな偏りがあるものが少なくない。

本博士論文で扱われた漢語福清方言は中国福建省の福清市で話される方言で、閩東語の一種とされる。福建省の省都福州市の福州方言についてはいくつかの重要な研究もあるが、福清方言は、その話者が華僑・華人として世界各地に居住し重要方言の一つでありながらも、わずかな先行研究にとどまっていた。その中でも冯爱珍(1993)、林寒生(2002)の2つの研究は特に重要であるが、やはり音韻・語彙の研究が中心であり、部分的な文法記述にとどまるなど問題も多い。また漢語方言の研究は中古漢語からの歴史的変遷に強い関心があるため、中国音韻学の手法による記述が主軸となる。歴史的な対応関係については大変有用であるが、一方で現代語の共時的なシステムを見る際には不都合な点も少なくない。

本論文は上記の状況にかんがみ、学位申請者である陳学雄氏（以下、「申請者」と記す）の母語である漢語福清方言の包括的な文法記述を試みたものである。内省および度重なる福清方言話者へのインタビューなどで採集した自然発話データに基づき、これまでの伝統的な中国音韻学や中国語学の枠組みにとらわれず、また理論的にも中立な立場で記述した本研究は言語学的に大変重要な位置を占めると評価される。

本論文の各章では、音韻論・各統語範疇に始まり、重要な文法現象であるモダリティとヴォイスにまつわる諸問題を中心に記述している。付録として約2000項目からなる福清方言の基礎語彙が提示されている。

本論文はさらに理論的な分析を行う必要のある箇所も多く存在するが、これまでの漢語福清方言の先行研究に比して圧倒的に詳細で豊富なデータに基づき、音韻と文法に関するバランスの良い記述に成功している。

以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士学位請求論文として、一定の基準に達しているものと判断する。

論文審査結果

本論文では序章において、本研究で扱う漢語福清方言の分布地域や言語使用状況、歴史的な位置づけについて概略を述べている。また漢語福清方言の先行研究として冯爱珍(1993)を中心に概観し、他の先行研究との相違点についても指摘している。また本研究が扱うデータの性質や調査方法、全体の構成についても記述している。

第一章は音論（音声学・音韻論）を述べる。漢語福清方言の音節構造はCVV(V)C/Tと模

式化できる。ここでは豊富な語彙データを示して、子音・母音・声調の各部位における詳細を記述した。そのうえで、特に複合語形成の際に問題となる音韻交替の現象についても具体的に述べた。頭子音・母音・声調の交替を整理・分析しているが、特に頭子音では順行同化現象を頻出するのが本方言の特徴である。また「融城鎮」以外の地域を考察対象としてみることで、福清方言内部の差異について確認することが出来ている。

第二章では名詞句と名詞句にまつわる問題を記述している。ここでは申請者は名詞句構造の全体的モデルを示し（「指示詞＋数詞＋類別詞＋名詞」）、各部分の詳細について具体例でもって記述を進めている。指示詞は近称と遠称の 2 系存在している。また数詞については基数と序数、概数などの表現について記述した。類別詞はホストとなる名詞の種類に応じて、詳細な例と共に整理している。また名詞の統語的な機能についても豊富な例と共に分析を行った。前置詞は動作地点、起点、着点、動作対象を標示するものを中心に記述したが、その使い分けや動詞との相違点については不明な点も多く、今後の課題となっている。

第三章では動詞句と動詞句にまつわる問題を扱っている。特に動詞とその周辺にある助動詞とアスペクト助詞について記述した。前者では o42 <有>「ある」、ɛ42 <会>「できる、はずだ」などの 7 種の助動詞について詳細に分析した。また動詞については語構成の様々な手法について取り扱った。特に「とりあえず～しよう、せよ」と動作を促す部分重複（衍生词）と特定の意味を担う母音重複（切脚词）の例について分析を施した。また形態統語的基準に基づいた動詞分類を行い、動詞の自他に基づく動詞連続構造の分析を行った。特に動詞連続については従来の「補語」の概念を用いずに分析したところは新しい。

第四章は「その他の範疇」として、主に形容詞と副詞の記述を中心に行った。まず、形容詞と名詞・動詞の違いを形態統語的な基準により区別し、形容詞の形態論的・統語的特徴を詳細に記述した。副詞は程度副詞・範囲副詞・頻度副詞・時間副詞・否定副詞の各カテゴリーについて具体例を豊富に示した。このほか、疑問語や助詞（属格助詞・文末/節末助詞）についても詳細に記述した。

第五章は「文法現象における諸問題」と題して、特定の文法問題を取り上げて論じた。＜有＞を用いた構文と焦点の関係、疑問表現の全体像、受身構文、使役表現のそれぞれについて詳しい記述を施した。特に＜有＞は、/uʔ/と/ou/の 2 形式存在することを明らかにしたうえで、後者が存在の有無に焦点があてられた場合に限定して用いられることを述べた。いずれの文法に関する分析も母語話者ならでは微細な差異に着目し、そこから体系を帰納する手法をとっており、従前の研究ではまったく不透明であった文法現象に新しい光をあてられたことは大きい。ただし、基本語順の問題や名詞修飾表現、節連結の問題など、本章で取り上げるべき重要問題はまだ多く、今後詳細な記述・分析が待たれる。

付録として漢語福清方言の基礎語彙約 2000 項目を東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所発行の『基礎語彙調査票』を申請者独自にアレンジして提示している。意味的な分類の上に、日本語の 50 音順の索引を付した本語彙集は、中国語学の諸研究に有用な資

料として引用され続けるだろう。

以上概観したように、本論文は母語話者の長所を生かして、漢語福清方言の音韻論・形態論・統語論にまたがる全体像の記述を行い、詳細な基礎語彙を提示できた点で、現代漢語方言研究に対する大きな貢献をなしたと評価できる。記述言語学的な手法をストイックに用いるあまり、他の漢語方言研究との比較が難しい場合がある点や、文法の諸問題などで理論的な分析が十分でないところは確かに認められる。しかし、本論文がこれまでに類を見ない程度に自然な語例と文例を豊富に示し、参照文法としてバランスの良い記述に相当程度到達した点は高い評価が与えられる。

最終試験結果

最終試験は2018年2月2日午後3時から、本学の三木記念会館で実施され、林範彦（主査）、太田斎、竹越孝の3名の本学教員と、愛媛大学の秋谷裕幸教授が審査にあたった。審査は公開で行われた。冒頭、学位申請者が論文要旨に関するプレゼンテーションを行った。そののちに各審査委員が論文に対する意見や感想を述べると同時に質問を行い、申請者がその各々について回答するという形式で進められた。本論文は日本語で記述されたため、論文要旨の説明と審査委員との質疑応答も日本語で行われた。

審査委員からは、先行研究および参考文献の取り扱いやレビューの問題、記述言語学的手法と伝統的な中国語学の手法的差異の問題、方言語彙の音声記述の問題、文法化の取り扱い、文法記述の偏り、語彙集の記述方法などの多くの問題について質問とコメントがなされた。今後の課題を多く指摘されることとなったが、審査委員の質問に対して申請者は本論文の立場に立って、誠実かつ十分な回答を行ったと判定される。

公開審査の終了後、全審査委員で合議を行い、本論文が内省および現地調査による具体的で豊富な言語データの収集実績とその分析手法の一貫性・統一性において優れた研究成果であると認められ、記述言語学・中国語学において大きな貢献をなしうるものであると高く評価できる点で合意が得られた。その結果、最終試験の評価を「合格」とすることが決定された。

以上である。